



大むかしの鴻巣



滝馬室出土土偶

鴻巣市には、大むかしの人々が生活していた跡が77ヵ所見つかっています。このような土地に残された生活の跡を遺跡（または埋蔵文化財）と呼びますが、この遺跡を調べることによって、当時の人々がどんなくらしをしていたか知ることができます。たとえば、狩りを中心としていた時代では、主に石器が使用され、稲作などの農業生産を行っていた時代では、銅や鉄の道具が使われるようになります。さらに土器について見れば、土器が全く無い段階、あっても種類が少ない段階、用途（機能）ごとに専用の形ができる段階などの移り代わりがあります。

これらの時代は古い方から旧石器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代・奈良時代・平安時代に区分されていますが、大きく原始・古代という名称で扱われることもあります。

では、次に鴻巣の遺跡を中心に古い時代から順にそのようすを見ていきましょう。



最古の狩人たち

鴻巣に人々が住み始めたのは、今から約2万～1万5千年前のことです。この時代は、まだ土器が発明されていないため、生活道具は主に石器です。動物の骨で作った骨角器や木器なども使用されていたと考えられますが、これらは腐りやすい材質のためほとんど残りません。

この時代は氷河時代ともいわれ、厳しい寒さが地球を覆った氷期と温暖な間氷期が交互におとすれていた時代で、最後のウルム氷期は、地球上の年平均気温が現在よりも7度前後も低かったようです。このため海水面が現在よりも100m以上低下し、日本列島は宗谷海峡や対馬海峡が陸化して大陸と陸続きとなっていました。この頃、ナウマンゾウやオオツノシカなどの動物を追ってわれわれ人類の祖先たちがやって来たのでしょうか。また、この時代の日本列島は火山活動が盛んで、関東地方では、富士山や浅間山などの火山が噴火を繰り返し、大量の火山灰を降らせていました。この火山灰が通称「赤土」と呼ばれる関東ローム層です。



図1.今から約2万年前の海岸線



旧石器時代の石器（鴻巣市内出土）

このように旧石器時代の人々は、寒暖が繰り返され、火山灰が降りつもるといった厳しい環境の中で、動物を狩り、自生する植物を採って暮らしていたようです。しかし、火を知り、道具を使い、小さな集団で移動する人々の生活は、私たちが想像するよりもはるかに高度なものだったようです。

市内には、この時代の遺跡が6カ所あり、ナイフ形石器・尖頭器・搔器などが発見されています。鴻巣警察署の北側にある新屋敷遺跡では、3軒の「イエ」があったようです。ここに一時の生活の場を求めた鴻巣最初の住人たちは、その後どこへ旅立ったのでしょうか。

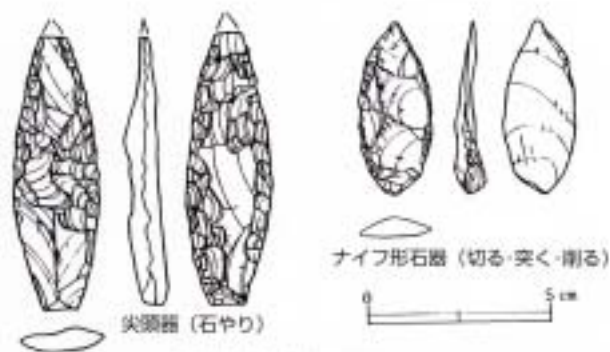


図2. 代表的な旧石器



旧石器の調査（赤台遺跡）

旧石器時代の終わり頃（約1万年以前）、世界的に寒冷な氷河時代は、温暖な時代へと移行します。この自然環境の変化は、森に棲む動物の生態系にも大きく影響し、ニホンジカ、イノシシ、クマ、ニホンザルといった動物が生息するようになりました。このような環境の下で、狩猟・漁労・採集といった生活もしだいに安定してきます。

今から約1万2千年前、土器の発明とともに始まった縄文時代は、約2千3百年前までの約1万年という時間をかけてゆっくり進歩しました。縄文時代を旧石器時代と区別する大きな特徴は、土器と弓矢が新たに使用されたことや定住が一般的になったことです。特に土器の使用は、以前の焼く、蒸すに対して煮るという調理法が加わったことにより、栽培植物（ドングリ・クリ・トチなど）の加工調理を可能にし、食生活を豊かにしました。

この長い縄文時代は、使用された縄文式土器の変化から、草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の六つの時期に大きく区分されています。

縄文時代の最初の頃は、前の時代と同じように洞窟や岩陰などを住居として利用していましたが、しだいに地面を掘り込んだ竪穴住居をつくり、それまでの移動を繰り返す生活から村を営むようになります。また、もっとも人口が増えた中期（約5千年前）には、100軒を超える大規模な環状集落も見られるようになります。また、この

頃になると天候に大きく左右される狩りと採集の生活に加えて、植物栽培も行われていたことが予想されます。

後・晩期になると気候が再び冷涼化し、全体として遺跡の数が減少します。豊かともいえた前・中期からしだいに生活不安におそわれる時期に移行し、それと関係するように呪術的な性格をもつ土偶、石棒などの特殊な遺物が多く見られるようになります。また、土器は装飾性がより高く、器種が豊富になり、壺・浅鉢・注口土器などがつくられるようになります。自然の脅威は、縄文人の精神文化に大きな影響を与えたようで、この時期特有の遺物（土偶・土版・石剣など）は、縄文人の祈りの産物であったのでしょうか。

市内には、縄文時代の遺跡が40ヵ所程ありますが、多くは前期から後期の遺跡です。そのうち阿弥陀堂遺跡・赤台遺跡・中三谷遺跡などが発掘調査された代表的なものです。

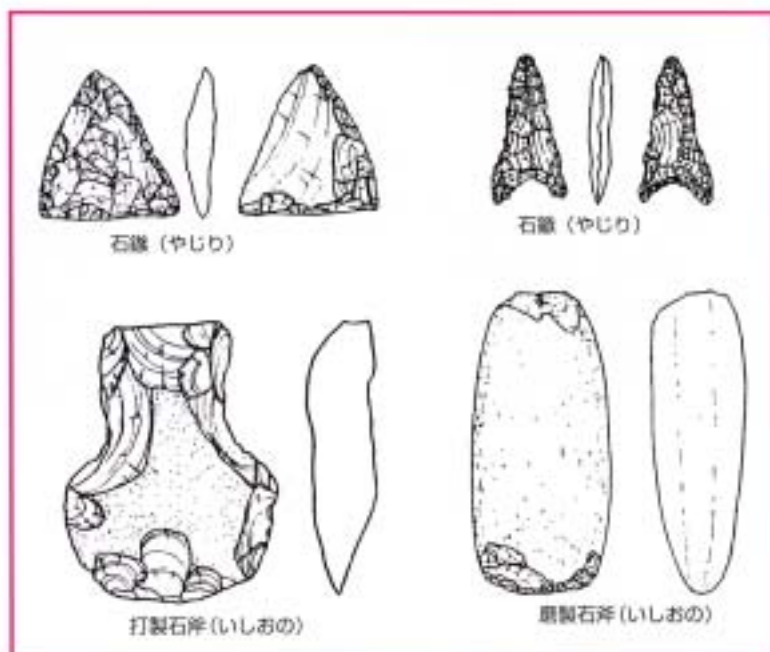


図3. 縄文時代の石器



縄文時代の住居（赤台遺跡）



浅鉢



深鉢



深鉢



注口土器

縄文式土器のいろいろ



滝馬室のみみずく土偶 (東京国立博物館蔵)

弥生時代

のう こう 農耕の発達とムラの生活

約2千3百年前、九州の北部で稲作が行われ、日本で初めて農耕文化が開始されました。中国から朝鮮半島を経て伝えられた稲作と金属器を使用する時代を弥生時代と呼び、およそ3世紀頃まで続きます。

弥生時代の特徴は、第1に稲作を基礎とする生活が開始されたこと。第2に日本で初めて金属器(青銅器・鉄器)が製作され、使用されたこと。第3に社会に支配・被支配の関係が生まれ、統一国家が誕生するまでの道が開かれたことが挙げられます。また、弥生文化で、固有の発達をとげたものとしては、銅鐸、武器形祭器(銅矛・銅戈・銅剣)、壘棺墓、方形周溝墓などがあります。

埼玉県で本格的な水稲耕作が行われたのは弥生中期の中頃(紀元前後)のことですが、この時期の集落の周辺には、有力者の墓である方形周溝墓が出現しています。これは水稲耕作の定着とともに人々の間に階層差が生まれたことを物語っています。後期になると石器に代わる道具として鉄器が普及し生産力が増大した結果、この時期には県南部を中心に大規模な集落が出現しました。

市内には、他の時代に比べて弥生時代の遺跡は極端に少なく、わずかに九右衛門遺跡から後期後半の壘形土器と登戸新田遺跡から後期末の方形周溝墓が見つまっているのみです。きっと、この頃の鴻巣地域には、いくつかの小さな集落が営まれた程度であったのかも知れません。



方形周溝墓(登戸新田遺跡)

死者をほうむった木の棺

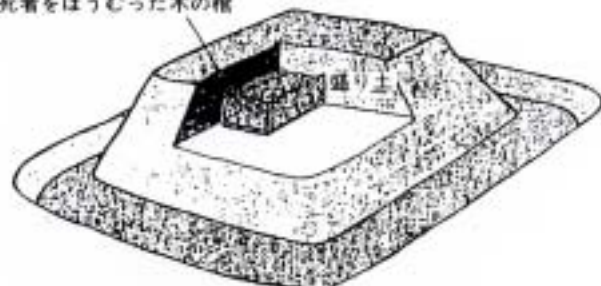
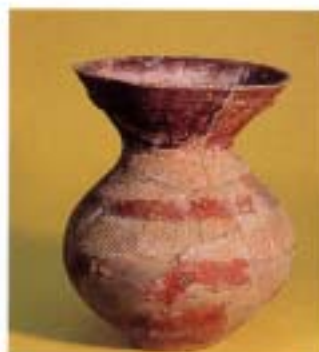


図4. 方形周溝墓の復元図



九右衛門遺跡出土壺

弥生式土器



登戸新田遺跡出土壺



古墳時代

古墳のつくられた時代

千7百年ほど前、円と方が接合したような鍵穴形の大きな墓が出現します。この墓はある地域を治めた豪族の墓で、前代の墓に比べて著しく大きいこと、定まった墳形（前方後円形）であること。長大な埋葬部に豊富な副葬品（青銅鏡）をもつことなどの特徴があります。このような墓を古墳といい、古墳が盛んにつくられた時代を古墳時代と呼んでいます。年代的には西暦300年頃から700年頃までをいいますが、このうち6世紀末から7世紀代を特に飛鳥時代と呼ぶこともあります。

古墳の平面形は、前方後円墳・前方後方墳・円墳・方墳が一般的ですが、上円下方墳や八角形墳などの特殊なものもあります。

古墳には人を埋葬する施設があり、前期は一人だけが葬られる竪穴式ですが、後期になると追葬可能な横穴式石室に変わります。また、古墳上には死者の霊を守るために大量の埴輪が立て並べられています。

古墳時代の生活基盤は、弥生時代以来定着した水稻耕作ですが、石器や木器に代わる鉄製農具の普及により、水田面積は飛躍的に拡大したと見られます。また、この時代には稲作だけでなく畑作も行われるようになり、窯業や鉄生産など種々の手工業生産も活発化しました。このような生産基盤の安定と発展こそが各地に強大な勢力を生み出し、巨大な古墳をつくることのできた経済力であったといえます。

古墳時代に使用された土器には、素焼きで褐色の土師器と硬質で灰色の須恵器の2種があります。土師器は弥生式土器から続く日本在来の焼き物です。一方、須恵器は朝鮮半島の陶質系の土器で、5世紀中頃に渡来した人々によって生産されるようになった焼き物です。このような土師器と須恵器は、それ以降の時代においていろいろな焼き物を生み出し、日本の焼き物の源流となっています。

市内には、古墳時代の遺跡がもっとも多く見つかっています。集落としては、赤台遺跡・下岡遺跡・大岡原遺跡、古墳群としては貫田古墳群・馬室古墳群・生出塚古墳群などがよく知られています。また、馬室埴輪窯跡や生出塚埴輪窯跡では、約120年間にわたり大量の埴輪が生産されていました。



図5. 古墳の種類と名称

むら
村の生活



古墳時代前期の住居跡（下層遺跡）



住居内の土器出土状態（下層遺跡）

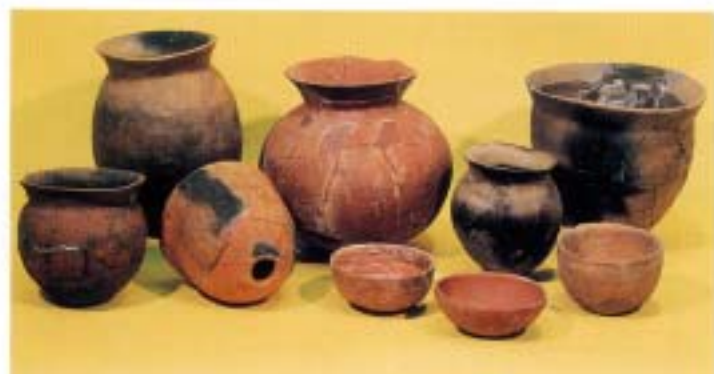


古墳時代後期の住居跡（赤台遺跡）



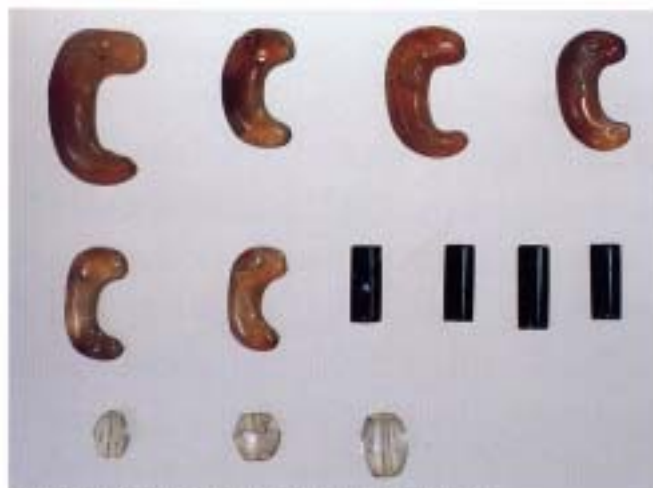
土師器（古墳時代前期）

大間原遺跡出土



土師器（古墳時代後期）

赤台遺跡出土



馬室古墳群出土の装飾品（勾玉・管玉・切子玉）



須恵器高杯（新屋敷遺跡）

大化の改新（645年）以後、我が国は律令国家としての体制を整えはじめ、701年には本格的な法律である「大宝律令」が制定されました。「律」は犯罪や刑罰についての刑法、「令」は政治制度や国のしくみを定めた行政法や民法で、この法によって統治された国を律令国家といいます。

710年、奈良に都（平城京）が定められ、794年に京都に都が移されるまでを奈良時代、京都に平安京が築かれ、鎌倉幕府が開かれるまでを平安時代といいます。

この時代には、天皇を頂点とした中央集権国家が誕生し、中央の国家機構の下に、国・郡・里（後に郷）の地方行政制度が整えられました。国には国の役所である「国府」が置かれ、中央から国司が派遣されてきました。また、郡の役所を「郡衙」と呼び、郡や郷では地元の有力者が郡司・里長に任命されました。

今の埼玉県と東京都を合わせた範囲は、当時武蔵国と呼ばれ、21郡からなっていたようです。このうち鴻巣地域は足立郡に属しており、足立郡は7郷で構成されていました。

武蔵国の国府は現在の東京都府中市にあり、足立郡の役所は武蔵一の宮といわれる旧大宮市の氷川神社付近にあったと考えられています。

市内の奈良・平安時代の遺跡数は、前代の古墳時代と比較して減少傾向にあり、17遺跡が確認されているに過ぎません。このうち住居跡が確認されているのは、宮前本田遺跡・九右衛門遺跡・新屋敷遺跡・宮地3丁目遺跡などですが、どれも一般農民たちの集落の跡です。



郡衙の正倉（復元）・岡部中宿遺跡（岡部町教育委員会提供）

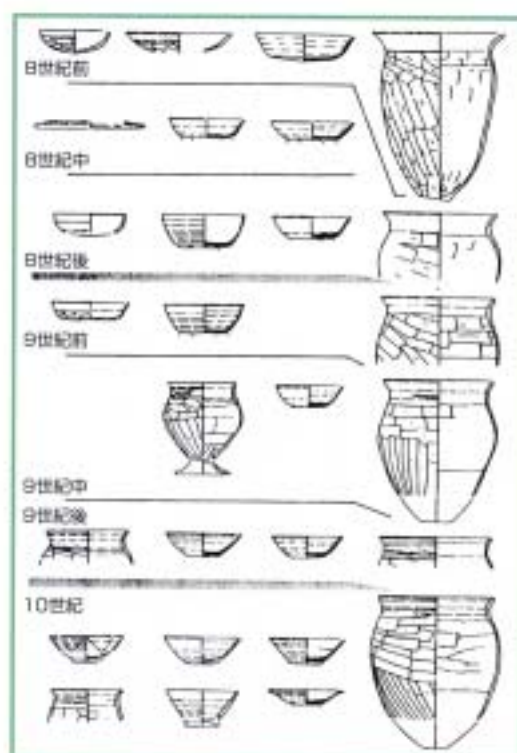


図7. 奈良・平安時代の土器の変化



図6. 武蔵国の郡域図



平安時代の住居（新屋敷遺跡）



伝 源経基 館跡

一方市内には、935年に起こった「平将門の乱」の事件に登場する源経基の居館と伝える館跡（伝源経基館跡）が大間にあります。この伝承が事実かどうかは不明ですが、この頃国司として派遣された役人の中には、そのまま地方の土着勢力となった者もいたことを物語っています。

歴史年表

年代	時代	主なできごと	埼玉県内のできごと	鴻巣市の主な遺跡	
紀元前	30,000	旧石器時代	ナイフ形石器の使用	新屋敷遺跡（東） 中三谷遺跡（鴻巣）	
	10,000				縄文時代
	300	弥生時代			
紀元後	300	古墳時代	方形周溝墓がつくられる	九右衛門遺跡（箕田） 登戸新田遺跡（登戸） 赤台遺跡（馬室） 下関遺跡（馬室） 大間原遺跡（大間） 生出塚埴輪窯跡群（東） 箕田古墳群（箕田） 笠原古墳群（笠原） 馬室古墳群（馬室）	
	300				飛鳥時代
	600	奈良時代			
	700				平安時代
	800	鎌倉時代			
	1,200				源頼朝、鎌倉幕府を開く（1192年）
		秩父から銅が献上される(708年) これを機に和銅開珎がつくられる	宮前本田遺跡（宮前）		
		保元・平治の乱（1156・1159年）	武蔵七党が台頭する	九右衛門遺跡（箕田） 新屋敷遺跡（東） 伝源経基館跡（大間） 中三谷遺跡（鴻巣）	
				丸池遺跡（鴻巣） 生出塚遺跡（東）	

鴻巣の文化財 第2号

一大むかしの鴻巣

平成13年11月30日

編集 鴻巣市教育委員会
発行 鴻巣市教育委員会・鴻巣市遺跡調査会

